

世界とつながり 未来を拓く 岡山グローバル人。

世界を元気にした人は、
日本も元気にできる！

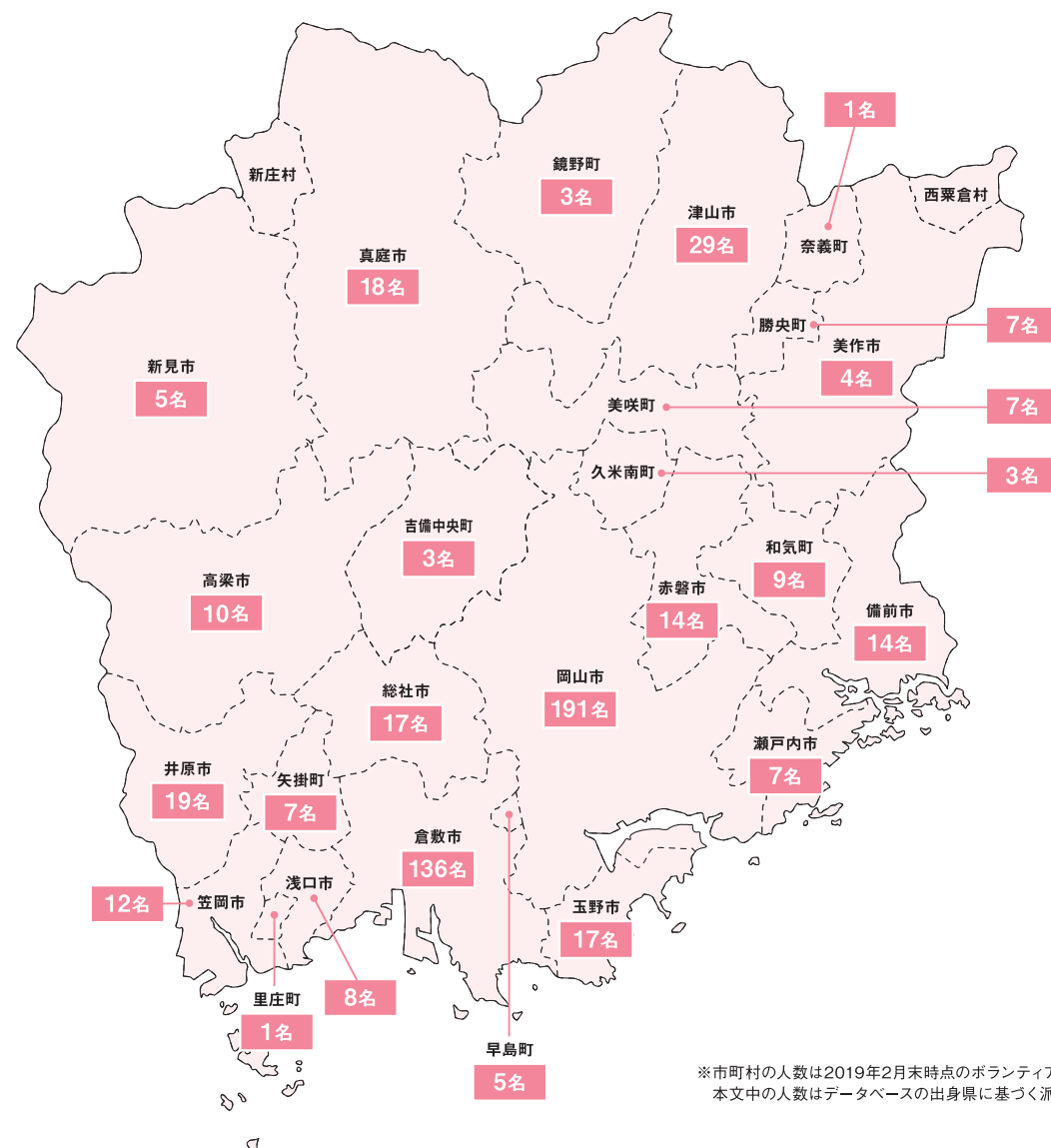


今度は地域を、もっと元気に

岡山県から青年海外協力隊・日系社会青年海外協力隊に参加した人は675人を超えました。

今、岡山県では、青年海外協力隊として活動後、この地域を元気にしようと、さまざまな場所でその力を発揮している人たちがいます。

《岡山県 青年海外協力隊及び日系社会青年海外協力隊派遣数》



※市町村の人数は2019年2月末時点のボランティア出発前表敬者数、本文中の人数はデータベースの出身県に基づく派遣実績数となります。

真摯に向き合い、自分の言葉で意志をもってニュースを伝えたい

No.01

KSB瀬戸内海放送
報道クリエイティブユニット
アナウンサー

中村 康人さん
なか むら やす と

▼派遣国
ブータン

▼職種
放送



英語教育に関わりながら、日本に暮らす外国人の橋渡し役に

No.02

岡山県立岡山瀬戸高等支援学校
教諭

吉田 絵美さん
よし だ え み

▼派遣国
中華人民共和国 トンガ

▼職種
日本語教育



帰国後の学生の笑顔が楽しみ 活動する立場から育てる立場に

No.03

国立大学法人 岡山大学
グローバル・パートナーズ
准教授

稲森 岳央さん
いな もり たか お

▼派遣国
ボツワナ

▼職種
村落開発普及員



国内外の災害に備えて 医療支援の輪を広げたい

No.04

NPO法人 アムダ (AMDA)
プロジェクトオフィサー
看護師

橋本 千明さん
はし もと ち あき

▼派遣国
タンザニア

▼職種
看護師



野球は楽しく、楽はせず 目標を定めて全員で夢を実現

No.05

おかやま山陽高校
教諭

堤 尚彦さん
つつみ なお ひこ

▼派遣国
ジンバブエ ガーナ

▼職種
野球/プログラムオフィサー





真摯に向き合い、自分の言葉で意志をもってニュースを伝えたい

No.01

KSB瀬戸内海放送 報道クリエイティブユニット
アナウンサー

中村 康人さん

なか むら やす と

福岡県出身。大学卒業後、大分のテレビ局に入局。30歳のときに「人生一度きり」と一念発起、32歳で興味のあった協力隊へ。ブータンのテレビ局で企画、撮影、編集など多岐にわたる放送業務を行う。帰国後は、KSB瀬戸内海放送へ就職。現在は月～水曜夕方の番組「KSBスーパーJチャンネル」でキャスターを務めるほか、番組制作等多岐にかかわる。

▼派遣国



ブータン

▼配属先

ブータン放送局

▼職種

放送

▼活動内容

当時、ブータン唯一のテレビ局で企画から撮影・編集・演出の計画指示など、番組制作に関わるさまざまな分野の指導を行う。

▼派遣期間 2001年12月～2004年1月

さまざまなタイミングが重なって

学生時代から協力隊に興味があったわけではなく、アナウンサーとして仕事を続ける中で「これまでの経験で何かお役に立てることはないだろうか」と30歳でふと立ち止まって考えたとき、「独身で身軽なこともあって、いい意味でふらついてもいいかな」と協力隊への挑戦を決めたという中村さん。当時、協力隊では中村さんの経験が生かせる放送業務に関する要請内容が多々あったこともチャレンジへの要因の一つでした。



何度も壁にぶつかり悩む日々

一日に1～2時間ほどしか放送していなかったという、赴任先の開局間もないブータンのテレビ局。「放送技術や番組制作について教えようと赴いたのですが、実際には現地は協力隊にマンパワーを求めていたのかな」と当時を振り返る中村さん。また、テレビ局には他にも日本人が在籍していましたが、制作現場に日本人は彼一人。自身は公用語である英語があまり得意ではなく、コミュニケーションも取りづらく、伝えたいことが伝えられなかったというもどかしさがありました。そこで、言葉ではなかなか伝えるのが難しいと感じ、「実際にやってみよう」と30分くらいの番組を黙々と制作。「本当に悩みながら何度も壁にぶつかりました」と模索する日々だったようです。



(上)ブータンでの取材風景
(左)ブータンでの世界最弱決定戦終了後の集合写真

一番印象的だったことは、「ワールドカップ(W杯)日韓大会決勝戦当日、ブータンの首都ティンブーで行われたブータンとカリブ海の英領モントセラトとの“世界最弱決定戦”でテレビ中継の指揮を執ったことかな」。

ブータンで初めて中継録画を実現させました。
「自分が作ったものが正解だったかどうかわからない。批評はいろんな角度からあります。私の方から“正解”とは言えない。ブータンではブータンのやり方がありますからね。日本のようなかっちりした番組制作ではないのだな」と実感したという中村さん。日本流の番組制作を教えたいと思いつつも、決して押しつけることのないよう、自身が制作する過程をブータンの人に見せることで何かを感じて吸収してもらえればという思いで業務に携わっていたそうで、「今思えば、自分の成長もありましたし、ブータンの人にも“こんなことをやっているのだ”と理解してもらえたのであれば、最終的によかったんだと思います」

生きた“言葉”を伝える大切さ

帰国後はKSB瀬戸内海放送に就職。現在は夕方のニュースでキャスターを務め、取材にも積極的に出向く日々。また、自身が発案し企画した「世界のためにできること」という番組では、開発途上国で貧困などから抜け出せず苦しむ現状を打破するために、岡山県・香川県出身者が活躍する姿を紹介。慣れない環境で彼らが手助けする様のありのままを伝えることで、「国際協力について考えるきっかけを後押ししたい」と中村さん。

「取材を通じ、さまざまな国の人にお会いする中で、その経験がどれだけ自分に生かせるかが大事。やっとなのですが、経験したことに対する生きた“言葉”が言えるようになってきたのではないのでしょうか」。実際に言葉で伝えるという仕事をする中村さんだからこそ、現場に出て見たものに対して伝えることの大切さをブータンでの2年間、そしてその後も学んできたようです。「これから“生きた言葉を伝えよう”という努力を惜しまないようにしたいです」



現在担当しているKSBスーパーJチャンネル

中村さんは
こんな人!

KSB瀬戸内海放送
報道クリエイティブユニット
アナウンサー

荒木 優里さん



フットワーク軽く、いろんな現場へ積極的に出かけ、タフですね。とくにシリーズで放送している「世界のためにできること」では、番組制作から関わり、取材先の選定から取材・編集とすべてを行い、観光地ではない海外の「知らないことを教えてくれる存在」として勉強になります。また、分かりやすくありのままを伝える双方向的な情報発信力は見習いたいです。

英語教育に関わりながら、 日本に暮らす外国人の 橋渡し役に



No.02

岡山県立岡山瀬戸高等支援学校 教諭

吉田 絵美さん

よし だ え み

岡山県出身。大学卒業後、高校の英語教師を経て協力隊へ。中国で2年間、中高一貫校で日本語を教える。帰国後は岡山県国際課の多文化共生事業に関わり、その後、言語教育をさらに学ぶため大学院へ進学。在学中の2014年9月、3カ月の短期派遣でトンガへ。同じく、中高一貫校で日本語を教える。帰国後は岡山県の高等学校教諭(英語)に採用され現職。

▼派遣国



中華人民
共和国

▼職種

日本語教育

▼派遣期間 2009年6月～2011年6月

▼配属先

湖北省黄冈市外国語学校

▼活動内容

中学生への異文化理解としての日本語授業、高校生への日本語教育・文化の紹介。また中国人教師の日本語能力・日本語教授法の向上を図る。

▼派遣国



トンガ

▼職種

日本語教育

▼派遣期間 2014年9月～2014年12月

▼配属先

エウア高校

▼活動内容

日本語を履修する生徒を対象に日本語の授業を行う。また文化研究レポートのリーサー内容や研究構成に関する指導を行う。

生徒に“英語は楽しい”と意識付け

岡山瀬戸高等支援学校は、知的障害の程度が軽度の生徒を対象として就労による社会的自立を目指す、高等部単独の特別支援学校。8年前に中・四国で初めて設立されました。吉田さんの専門教科は英語。週1時間、1年生5クラスを対象に英語を教えています。担任している学年は3年生で、職業教育や生徒の実習先、就職先を探すなど、就職を希望する生徒たちの指導・支援を行っています。「企業さんとの交渉など初めての経験なので、毎日がめまぐるしく忙しいですが、とてもいい経験をさせてもらっています」と吉田さん。就職先が決まったという生徒さんの報告をもらうときには、ほんとに安堵するようです。

英語の授業では、協力隊で行ったトンガの人たちのビデオレターを生徒に見せたり、民族衣装を着たりして“英語は楽しい”というイメージを生徒にもってもらえるように工夫。「特に教科書があるわけでもないで、生徒たちの実態に合わせてオーダーメイドの授業を作るのは大変ですが、生徒が喜んでくれ興味を持ってくれれば、とてもやりがいを感じます」



海外で仕事をしたかった

中学生のころから英語が好きで、海外へ興味を持ち始めたという吉田さん。海外で仕事をするにはどうすればいいかと考えたとき、日本語教師になろうと考え、日本語教師の資格が取得できる大学へ進学。大学時代に協力隊のことを初めて知り、日本語教師での



(上)トンガの生徒と一緒に
(左)トンガの卒業式で



採用枠があることも知りました。「私は慎重派なので、説明会は4～5回行きました。そして、日本語教師のOVの方がいらっしゃったら、必ず体験談などをお聞きしていました」とのこと。しかしその後、協力隊に応募しましたが不合格となり、岡山県内の高校に常勤講師として勤務。働きながら「英語教員として海外経験は絶対必要。絶対に協力隊に行く」という強い信念をもって、4回目のチャレンジで見事合格しました。

協力隊として最初に派遣されたのは中国。「生徒は日本のアニメにとっても興味があって、私よりとっても詳しくかったですね。彼らに受け入れてもらえるよう、日本語の例文にアニメのキャラクターを使うこともありました」。言葉や文化が違う中で「どうやったらコミュニケーションが円滑に行えるか」を悩み考えた分、自身にコミュニケーション能力としなやかさ、柔軟性が身に付いたと実感しています。

その後、短期ボランティアとしてトンガでも日本語教師として活動。「島国でのんびりとした国。中国での経験があったので、すんなりと入ることができて精神的にもゆとりがありました」。その分、トンガの人びととの交流など積極的に行い、楽しい思い出となったようです。

今は頑張るとき。経験は財産

「高校教諭として採用され、赴任校が特別支援学校とは予測していなかったもので正直驚きました。教育システム等が普通の高校と異なり、まさにカルチャーショック。腰を据えて頑張ろうと思いました」と吉田さん。

「今後は協力隊で活動してきた実体験を生かし、生徒に海外へもっと興味をもってもらえるよう努めることが使命だと考えています」。さらにもう一つ、日本に住む外国人をサポートする活動をしたいと思うようになりました。学校現場でも、外国にルーツをもつ生徒が増え、特に日本語があまり話せない保護者の方がサポート体制や手続きも知らず、困っているのを目の当たりにすることがあるのだとか。協力隊や帰国後に県の多文化共生事業に関わった経験をふまえ、今はそういった方たちにも何かできることはないかと模索中です。



吉田さんが担当する学級での英語の授業の様子

吉田さんは
こんな人!

岡山県立
岡山瀬戸高等支援学校
教諭

谷本 和子さん



きっと戸惑いもあると思うのですが、生徒をしっかりと見て、企業への調査書もきっちりと書かれています。とても忙しく、いつ休んでいるのだろうという感じですが、週1度の英語の授業では、トンガの民族衣装を着用したりするなど、生徒に楽しく興味をもってもらえるよう、彼女なりに工夫を凝らしているようです。生徒への高いモチベーションや根気などは協力隊で培われたものでしょうね。

帰国後の学生の笑顔が楽しみに活動する立場から育てる立場に

国立大学法人 岡山大学
グローバル・パートナーズ 准教授

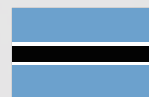
No.03

稲森 岳央さん

いな もり たか お

東京都出身。大学ではアメリカで農業実習を、大学院ではタイで農村調査を経験。1年間、農業高校に非常勤講師として勤め、2度目の挑戦で協力隊に合格。1998年に村落開発普及員としてアフリカのボツワナへ。3年間の活動後、JICAジュニア専門員に。「もっと国際的に活躍したい!」と考えイギリスに留学、組織行動学を学ぶ。2011年7月に帰国、開発コンサルティング会社勤務を経て、2015年から現職。

▼派遣国



ボツワナ

▼配属先

障害者青少年自立支援訓練施設 レホディモ

▼職種

村落開発普及員

▼活動内容

障害のある青少年のための職業訓練施設での自立支援に協力。特に、オレンジや野菜などの栽培、施設運営の指導にあたる。

▼派遣期間 1998年7月～2001年7月

協力隊で身につけた力を学生に

2014年秋、文部科学省から「スーパーグローバル大学」に選ばれた岡山大学。140年以上の長い歴史を持ちながら、グローバル化をけん引する大学として国際化と教育改革に積極的に取り組んでいます。稲森さんは同大学の准教授として、「グローバル・パートナーズ」(旧国際センター)で学生の国際交流活動をサポート。短期・長期留学のプログラム開発や運営、異文化理解や危機管理等について英語による授業を日本人学生や留学生対象に行っています。語学力、異文化の受容能力、危機管理能力は、稲森さんが協力隊で実際に経験して身につけたもの。「留学はグローバル化に向かう社会が求める人材育成に欠かせない」という言葉にも説得力があります。

稲森さんが協力隊を目指した理由も、そこに繋がります。18歳人口が多く、厳しい受験戦争、そして就職氷河期を過ごした世代。「自分の将来を考えたとき、みんなとは違うフィールドで闘いたいと考えました」。農業系の大学に進学、さらに大学院で農業技術を通して国際協力にかかわりながら、協力隊へと進みました。



(上)ボツワナでの同僚との写真
(左)土木作業をした仲間と一緒に

世界のどこでも生きていける自信

赴任先は、10代から20代はじめの知的・身体に障害のある子どもたちが暮らす自立支援施設。子どもたちと寝起きをともにしながら、オレンジの栽培指導を中心に、野菜の栽培、ブタ、鶏、牛の飼育の指導に当たりました。「指導というよりも一緒に働くという感覚ですね。施設づくりもしましたよ。コンクリートを練る技術は自慢できます」と笑います。

活動しながら稲森さんが気づいたことがあります。「事業の成功は人間関係次第。失敗の原因は農業技術ではなく、現地の人々との関係や子どもたちとのかわりかただと分かりました」。現地に早く溶け込もうと質素な現地の食事を一緒にとった結果、栄養不足で口内炎を17個つくったり、「時にはおいしいものを皆で食べて楽しもう!」と毎月バーベキューを計画したり、試行錯誤しながら少しずつ信頼関係を築いていきました。「協力隊としての3年間の経験によって、どこでも生きていける、どこにでも行けるという自信が持てました」

全ての経験が今に繋がっている

JICAのジュニア専門員やコンサルタントを経て、現在は大学でグローバル化に対応する人材育成に携わる稲森さん。これまでのキャリアのどこを切り取っても国際協力にかかわる仕事ですが、かわり方は自ら活動する立場から、活動する人を育てる立場へと変化しているようです。「学生たちの変化や成長を間近で感じ、これまでとは違うやりがいを感じています。留学した学生たちがどんな笑顔で帰ってくるのか楽しみ」と目を細めます。

国際協力活動の幅広さを自身の体験を通して具体的に伝えてくれる稲森さん。「協力隊のときのことを思い出すと、十分な成果が出せなかったなと思います。でも行ったことに後悔はありません。遠回りしたけどすべてが今に繋がっていますから。またいつか、シニア海外ボランティアとして海外に行ってみたいですね」。奥様も協力隊OGで「どちらが随伴家族になるかと話合っています」と、ご夫婦で国際協力への情熱は変わることがありません。



稲森さんが担当するゼミでの授業風景

稲森さんはこんな人!

国立大学法人 岡山大学
グローバル・パートナーズ
教授

神原 信幸さん



彼を知る人は誰もが言うと思いますが、本当に心がキレイな人です。「農業」という育てることを基本とする学問を選び学んできたこと、協力隊として開発途上国で活動してきたという彼のバックグラウンドを考えるとより納得できます。大学でも人を育てる温かい心を持ち、学生たちの国際交流活動をサポートしてくれています。ものごとをとらえる広い視野は、学生のよい手本となっています。

国内外の災害に備えて 医療支援の輪を広げたい



No.04

NPO法人 アムダ (AMDA)
プロジェクトオフィサー 看護師

橋本 千明さん

はし もと ち あき

島根県出身。社会福祉系の大学卒業後、看護専門学校にて看護師資格を取得。外航船の船員だった父親の影響もあり、幼いころから海外に興味を持つ。「海外に行きたいのなら語学だけではダメ、何か手に職を」という父親のアドバイスもあって看護師に。総合病院にて3年間勤務後、2010年から協力隊としてタンザニアのネワラ県立病院にて妊婦健診に携わる。帰国後、病院(外科)勤務等を経て現職。

▼派遣国



タンザニア

▼配属先 ネワラ県立病院

▼職種

看護師

▼活動内容

妊婦健診に携わり、人員不足やスタッフの意識の低さから十分な説明やケアが不足していた業務の改善を促す。

▼派遣期間 2010年3月～2012年3月

国内外の医療経験を生かし、緊急災害医療をサポート

橋本さんは、タンザニア南東部のネワラ県立病院で妊婦健診に携わった後、帰国後は実家のある千葉県でJICAの出前講座として、看護学校などで青年海外協力隊の体験談を講演。自身が経験したことを伝える難しさを実感しつつ、次の進路を迷う中、「タンザニアでの経験から、海外ではスペシャリストよりジェネラルな看護師の方が通用するのでは」と考え、総合病院に勤務してこれまで経験のなかった外科を担当。その後、医療関係のNGOで国内の島々やアジアを巡る研修にも参加しました。

帰国後、医療・保健衛生分野を中心に緊急人道支援活動を展開するNPO法人AMDAに。

橋本さんは担当エリアの医療品の管理や国内外の被災地へのボランティア派遣など、これまでの看護師としての専門知識と国内外での経験を生かし、活躍中です。



妊婦健診に関わり、人に寄り添う貴重な経験

「早く海外を見たい」と海外への憧れを持ちながら、看護師として新生児科に勤務していたころ、同期が青年海外協力隊へ派遣されることを知ります。「私も海外へのチャンスをつかみたい」と協力隊への応募を決意しました。

当初は「嫌になったらすぐ帰れるかな」というくらいの軽い感覚で、アジアを希望。しかし赴任先は国名を聞いたことのないタンザニア。「未知の国で協力隊らしい活動ができるかな」という期待半分、不安が半分でした」と橋本さん。文化や宗教、肌の色をみても「私は日本人だな」と現地入りして、改めて実感したと言います。



(上)カウンターパートと5S活動の会議に出席
(左)小児病棟で同僚と業務改善ポスターの掲示

配属先の病院は、日本人が橋本さんで3人目だったこともあり、日本や日本人に対して馴染みもあり好意的で職場環境は良好。スタッフとお茶の時間を一緒にとるなど、現地の作法にも従いながらスタッフ間のコミュニケーションを図っていきました。業務の乳幼児健診では体重を測り、お子さんが成長曲線のグラフに沿ってきちんと成長しているかを確認、異常があれば指導するというシンプルなもの。健診が屋外で行われていたのは驚いたことの一つ。橋本さんが働いていた病院は県で一番大きな病院だったこともあり、遠くの村からバイクで2時間もかけて妊婦さんが健診に訪れることもあり、タンザニア人のたくましさを感じたそうです。現地の人にできるだけ寄り添い、専門用語を簡単に分かりやすい言葉に言い換えて伝えるなど工夫もしたのだとか。印象に残っているのは橋本さんが患者さんと呼ばかけた際、なかなか発音もままならず応じてもらえなかったとき、周りみんなでザワザワと名前を呼んでくれて助けてくれたこと。タンザニア人の優しさを改めて感じたそうです。

国内外の人道支援のパイプ役に

「AMDAではこれまで経験のない、医薬品の管理など新しいことにトライさせてもらっているの、日々勉強です」。また、南海トラフ地震などの大きな災害に備え、医者や看護師らを医療チームとして病院から派遣してもらえるように、岡山県を中心に近隣県の医療機関を回り、「こういった災害への備えとして総合病院との関係を構築するだけでなく、一般の病院や地域の医療機関の人材がもっと外部に出やすい環境になればいいと考えています」と橋本さん。AMDAを通じ、様々な医療関係者に海外への医療支援活動に目を向けてもらえるよう、今後も自身の活動を広げていきたいそうです。



AMDA熊本地震緊急救援活動の様子

橋本さんは
こんな人!

NPO法人 アムダ (AMDA)
理事長 事務局長兼任
成澤 貴子さん



橋本さんの第一印象はおしとやかで穏やかな人。看護師としての資質なのかもしれませんが、スタッフへの申し送りや状況把握、指示がとて的確です。また医療職ではない私たちには、できるだけ専門用語を使わず、分かりやすい言葉で伝えるようにしてくれていますね。仕事の完結力が高く、しかも細かい事務作業なども面倒くさがらず着実なのは協力隊での活動がいきているのではないのでしょうか。



No.05

おかやま山陽高校
教諭

堤 尚彦さん

つつみ なお ひこ

兵庫県出身。野球の強豪校、東北福祉大学に入学。テレビでJICAの活動を知り、1995年に野球指導でジンバブエへ。帰国して大学で開発経済を学んでいた時、短期ボランティアとしてガーナに1年間赴任。その後、日本のスポーツマネジメント会社に勤め、ゴルフ選手の諸見里しのぶのマネジメントなどにも携わる。仕事の傍らアジアの野球普及にも寄与。おかやま山陽高校からの依頼で、2006年から同校野球部監督。

▼派遣国



ジンバブエ

▼職種

野球

▼配属先

スポーツ・レクリエーション省スポーツ・リクリエーション部

▼活動内容

小学生から高校生に野球を指導し、その普及に努める。学校の先生に対する講習会を開催する。

▼派遣期間 1995年12月～1997年12月

▼派遣国



ガーナ

▼職種

プログラムオフィサー

▼配属先

青年スポーツ省
国家スポーツ評議会

▼活動内容

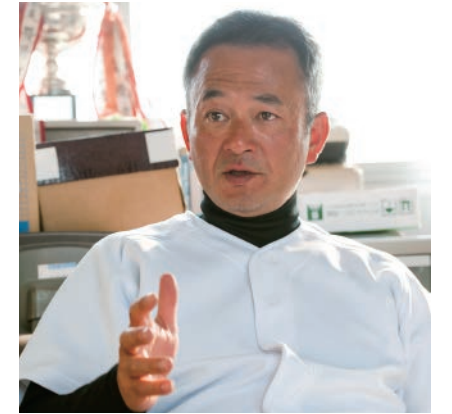
ガーナでの野球普及と強化。

▼派遣期間 1999年4月～2000年3月

好きだから頑張れる、そんな野球を目指して

おかやま山陽高校硬式野球部のモットーは“楽しく、しかし楽(らく)はせず”。「野球を楽しむするには、野球を好きでなければならない。好きだから辛くても苦しくても楽しくできる。楽しくとらくは違うのです。好きならば、野球の歴史や現状、このルールはなぜできたのかなど、無限に知りたいことが湧いてくるはず。選手それぞれのレベルで野球のスキルと人間性を成長させてほしい」。そう語るのは、同部監督の堤さん。2006年に監督に就任し、2011年からJICAの「世界の笑顔のために」プログラムにも協力。世界23か国の子どもたちに野球の中古道具を送付しています。

このような活動を始める前までは、グラウンドには雑草が生えっぱなし、部員の寮は荒れ放題。チームはかなりすさんだ状態だったそうです。



呼ばれるようにジンバブエへ

堤さんは協力隊OB。数多くのプロ野球選手を輩出する東北福祉大学の野球部に所属し、ベンチ入りもできず野球が楽しくなくなっていた大学3年、ジンバブエで野球を普及させようと奮闘する男性を取り上げたテレビ番組を見て協力隊に応募。念願のジンバブエに赴任し、小学校から高校まで全50校を巡回して野球を指導しました。



(上)現地で金属バットを制作
(左)少ないグローブでのキャッチボール

普及が進むと、道具の調達と指導者の育成に取り掛かります。当初は自身の車を売って送料を工面し、日本から中古道具を送ってもらっていました。「野球はたくさん道具が必要なので貧しい国では普及しないと言われた。でもお金がかかるということは、お金を生むチャンスでもある。途上国の役に立つはず」。現地での道具の開発、販売の仕組みづくり、流通経路のコーディネートのために動きます。指導者は、体育大学や教育大学に交渉して学生たちに野球を教えて養成。最終的には単位認定される選択科目となりました。そのほか、スポーツ省との折衝、指導者、審判員の育成とライセンス制度の構築、野球協会の設立と組織化・運営、年代別ナショナルチームの選考・指導とあらゆることを手掛けました。

全力疾走の2年間。英語での意思疎通が思うようにできず、所属先のスポーツ省とケンカをして活動地域追放になったことも。支えとなったのは、活動を支えてくれる現地のパートナー、17歳のモーリスの存在。「一人では何もできない」と実感。彼も堤さんに影響を受け、現在、ジンバブエの野球協会の会長を務めています。

一人の夢はただの夢、みんなの夢は実現できる夢

帰国後、大学で開発経済を学ぶも、もの足りなさを感じていた時、アフリカ大陸野球連盟の要請で、短期ボランティアとしてガーナへ。全8回の授業で野球ができるようになるプログラムをつくり、現地のナショナルチームに指導に当たらせました。その後、スポーツマネジメント会社などを経て気が付けば30代なかば。「野球を世界で普及させるために、そろそろ志をつなげてくれる人材を育てなければ」。そんな時、おかやま山陽高校から硬式野球部の再生を依頼され、「必要とされている場所に行く」という信条にそって決断しました。

「当初は厳しく指導しましたがやめました。3つ悪いことをしたら5つよいことをすればいいというルールに」。そのよいことの一つが不要な野球道具を集めてJICAへ送り、JICAボランティアを通じて現地の人に届ける活動「世界の笑顔のために」。続けるうちにチームの様子も落ち着き、少しずつ勝てるように。地域に応援してもらえる野球部を目指して県外から生徒を呼び寄せる野球留学をやめ、寮も廃止。現在、地元の子もたちで部員は90人、プロ野球選手も輩出しました。指導者や協力隊になって野球を普及させたいという生徒も生まれています。

「目標を定めるからこそたどり着ける未来がある。一人の夢はただの夢、みんなで見る夢は実現できる夢です。私たち野球部の次の目標は甲子園に行くこと。注目を集めれば、私たちの活動を知ってもらえますから」。野球を通して、仲間と手を取り合い、広い視野で社会をとらえることができる人材の育成に力を注いでいます。



中古道具の梱包をする生徒たち



中古道具を修理するガーナ人

青年海外協力隊員が

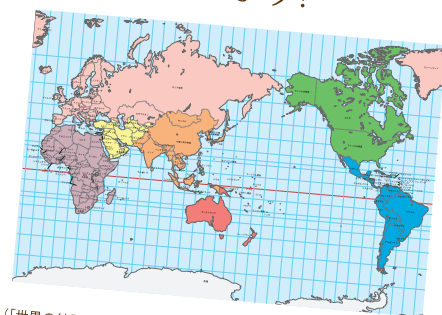
活動するのは開発途上国。

遠い国のようですが、実は世界の中の

存在感は大きく、日本や岡山県とも

いろいろな繋がりがあります。

- ① 世界には約195か国の国がありますが、そのうち、開発途上国とされる国は何か国でしょう？



(「世界の統計2016」<http://www.stat.go.jp/data/sekai/0116.htm>より)

- ② 外国人にも人気の日本食。海外にある日本食レストランの数は？



(「海外における日本食レストランの数」<http://www.maff.go.jp/j/press/shokusan/service/pdf/150828-01.pdf>より)

- ③ 海外進出している岡山県の企業のうち、開発途上国に進出しているのは？



(「岡山県企業の海外事業展開状況調査報告書 2016年4月」日本貿易振興機構ウェブサイトより)

- ④ デニムの産地として有名な岡山県。日本のデニム輸出先上位4か国は？



(「デニムの輸出について」神戸税関ウェブサイトより)

クイズの答えは15ページ下部をご覧ください。

中国地方を元気にする国際協力を目指して

JICA中国は、中国5県の国際協力の拠点として、市民の皆様が青年海外協力隊などのJICA事業や開発途上国に関する情報を提供したり、開発途上国の行政官や技術者に、日本の経験や技術を学んでもらう機会を提供しています。自治体やNGO、大学、民間企業などと連携した国際協力事業の推進も行います。中国地方の魅力を世界に発信するとともに、国際協力を通じた地域活性化や民間企業の海外展開の促進により、中国地方の地域創生にも貢献していきたいと考えています。JICA中国は、中国地方も元気にするウィンウィンの国際協力を推進していきます。



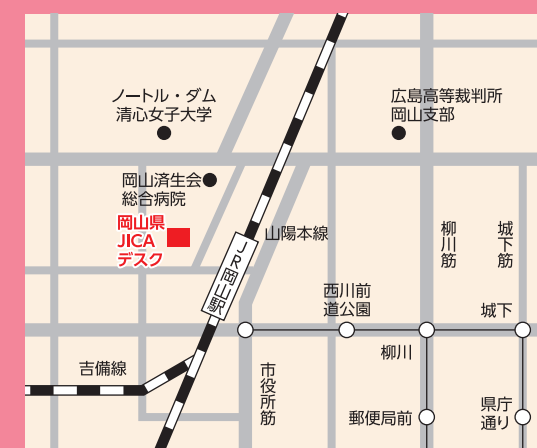
JICA中国

独立行政法人 国際協力機構 中国センター
〒739-0046 広島県東広島市鏡山3-3-1
TEL:082-421-6300(代)
FAX:082-420-8082



岡山県JICAデスク

配属先: (一財)岡山県国際交流協会
〒700-0026 岡山県岡山市北区奉還町2-2-1
岡山国際交流センター内
TEL:086-256-2917 FAX:086-256-2489
Eメール: jicadpd-desk-okayamaken@jica.go.jp



クイズ(14ページ)の答え

A1:約150か国です。人口でいうと世界人口約73億人のうち約8割が開発途上国に住んでいます。
A2:約8万9千店です。そのうち半数以上(約4万5千店)がアジアにあります。アフリカにも約300店の日本料理店があります。
A3:進出先の約7割が、開発途上国です。中国が4割強を占めますが、それ以外の開発途上国に進出している企業が約25%です。
A4:中国、バングラデシュ、アメリカ、ベトナムです。



世界を変えてきたのはいつの時代も、たったひとりの強い想いだ

青年海外協力隊は現地の人びとと同じ言葉を話し、

ともに生活・協働しながら開発途上国の国づくりのために活動しています。

1965年に開始され、これまでに91か国に44,000名以上を派遣しました。

JICA中国

〒739-0046 東広島市鏡山3-3-1

TEL:082-421-6300(代表)

FAX:082-420-8082

URL: <https://www.jica.go.jp/chugoku/>

JICA海外協力隊

検索

独立行政法人 国際協力機構 中国センター